

(金のエンジェル賞 幼児・小学生低学年の部)

ブレーカーのヒミツ

小一・横溝麻志穂

「ジッ、ジッ、キリン」

「あっ、百点こえた」

朝早くから、セイちゃんのさけび声だ。また電気のブレーカーがおちたのだ。

せんめんじよでドライヤーを使うパパも、キッチンのオーブントースターでパンをやくママも、ダイニングでテレビを見るねえちゃんも、毎朝みんなじゃまされる。

色は白くて形は四角。セイちゃんがおしたくなるスイッチが六つ。毎日セイちゃんはこのブレーカーがおちるのが楽しみ。でもおちるのは一度に三つの電気をつけたとき。二つの電気ではおちない。だから二つの電気をあわせて百点だってセイちゃんは思ってる。

ある日、セイちゃんがお昼ねから起きると、家にはママがいなかった。パパはお仕事、ねえちゃんは小学校だ。

「ハッハッハ。シクシクシク」

と急にどこからか、大きな笑い声と小さな泣き声がきこえた。セイちゃんがキッチンへ行くと、ドドンとブレーカーの中から二つの光がとび出した。一つは五才の子の手のひらの形をした男の子ともう一つは五才の子の手の親指の形をした女の子だった。

「君たちはだれ？」

とセイちゃんがおどろいてきいた。

「笑うぼくはハッハ。泣くのはシク。ぼくたちは二人で一つ。二人より多いとブレーカーがおちるんだ」

と男の子が答えた。そして二人は消えた。

その時、ママとねえちゃんが帰って来た。ママは急な雨でねえちゃんにかさをとどけに行っていた。セイちゃんは男の子と女の子のことが気になった。あの二人がブレーカーの二つの電気かもしれないからだ。

次の日の朝、パパが電気量をあげることに決めた。ママもねえちゃんもブレーカーがおちなくなると安心した。ただセイちゃんだけは、あの二人がどうなるのか心配だった。

その日の夜、我が家を震度七の大地震がおそった。家族全員で車の中に逃げた。そしてすぐに停電になった。

大地震はこわかった。でもセイちゃんはあの二人のことがとても気になった。暗闇の中をキッチンへ走った。後を追ってねえちゃんがキッチンに行ったその時。

「ぼくたちは二人で一つ。君の右の手のひらはうれしい時のあくしゅ、左の手の親指はかなしい時のおしゃぶりをするんだよ」

とセイちゃんに二人のはなす声がした。ブレーカーからは、その後声はしなかった。

セイちゃんとねえちゃんは目を丸くした。何も知らないねえちゃんにセイちゃんは二人のことをはなした。

大地震の停電は一週間続いた。灯りもヒーターもつかなかった。かなしくなったセイちゃんは、左の手の親指をおしゃぶりした。

するとぼつと電気がついて、やっと明るい家になった。家族全員、とても喜んだ。

大地震で休んでいた小学校がはじまる前日。ねえちゃんが九九の

宿題をしていた時。

「ブレーカーのヒミツ、わかったよ」

とねえちゃんはセイちゃんにノートを見せた。

64	4 ^シ	8 ^ハ
+	×	×
36	9 ^ッ	8 ^ハ
100	36	64



「ブレーカーのヒミツ」 横溝麻志穂

Hirromichiito

画：ヒロミチイト

「ハッハ君とシクちゃん、二人で百点だ」

「やっぱりね。ねえちゃん、ありがとう」

と二人はうれしくなった。ねえちゃんとあくしゅをすると、セイちゃんの右の手のひらがぱつと光った。「そのとおり」というように。

節電のため、我が家は電気量をあげなかった。その後も二つの電気しか使えないこのブレーカーを使い続けた。

セイちゃんはヒミツを知ってますますブレーカーをすきになった。またうれしい時もかなしい時も、あの二人がそばにいていっぱいの元気をもらった。